



# 岡山大学 ナノバイオ標的医療の 融合的創出拠点の形成

ICONT (Innovation Center Okayama for Nanobio-targeted Therapy)

岡  
大  
医学・医療の最前線

## 長寿社会の優しい医療

31



公文 裕巳 (岡山大学ナノバイオ標的医療イノベーションセンター長 泌尿器科 教授)

この連載は、岡山大学の「ナノバイオ標的医療」に関する研究の展開を中心に新しい医療の創造について解説しています。

シリーズ27からは、がんに対する標的医療が新たに動脈硬化の診断と治療に広がっていった過程についてお話ししました。標的医療の範囲がこのように拡大していくのは、悪いところを早めに診つけて、そこだけを優しく治すというナノバイオ標的医療の開発コンセプトが、近代医療の進化の潮流そのものであるからです。

21世紀医療の目標の一つとして、病気になりやすさや薬に対する反応性など一人ひとり異なる個人的要因(遺伝的情報に基づき)をわける体質などと病気の種類やその進み具合などに合わせた個別化(オーダーメイド)医療の確立が挙げられます。

また、治療から一歩進んで病気の予防に向けてのテーラーメイド戦略も最終ゴールの一つにな

り、ナノバイオ標的医療のゴールもそこにあります。つまり、標的医療を含めた21世紀医療は、一人ひとりの個性やニーズに合わせて、QOL(生活の質を重視する)人に優しい医療の実現という方向性に収束しつつあるといえます。

そのような観点から、私の専門領域である泌尿器科医療とその新しい方向性についてお話しします。

本年4月16、19日の会期で、日本泌尿器科学会会長として第97回総会を岡山で開催しました。おかげさまで、「泌尿器科学」変革と未来力」をメインテーマとする総会は、国内外からの招待者らを含む6150人の方々に参加いただき、盛会裡に終えることができました。

近年の医学・医療の高度化に伴い、いわゆる総合臨床科(内科、外科)が細分化される中、泌尿器科は細分化、深化した領域を融合的に発展させ、従来の男性専科



人に優しい医療の実現

泌尿器科は人生80年代のカップルライフを支援する総合臨床科です!

この革命的医療が臨床現場に登場して20余年、今またロボット手術(ダヴィンチ・システム)が世界的には前立腺がんに対する根治的・前立腺摘除術の主流となっておりあります。

さらに、遺伝子治療を中核技術とする標的医療が前立腺がんの治療を基盤として発展しているという事実は、泌尿器科医療が「人に優しい医療」の実現をミッショ

ンとしてそのフロンティアに立ち続けていることを物語っています。

泌尿器科医療の代表的な領域は、尿路がん、尿路感染症、尿路結石、排尿機能不全・腎移植、内分泌・生殖機能・性機能、女性泌尿器科、小児泌尿器科、内視鏡・腹腔鏡手術の9領域に分けられます。泌尿器科がこれだけ広範な領域を扱っていることは一般的には必ずしも認識されていないかもしれませんが、現実には既に「総合臨床科」と呼ぶにふさわしい多彩な領域をカバーしています。

がんの領域では、典型的な高齢者ががんとして急増を続ける前立腺がんのほかに、膀胱がんや腎臓がんの増加も問題となっています。また、長寿社会の実現に伴い高齢者特有の排尿トラブル、中でも最近そのメカニズムが明らかになってきた過活動膀胱(尿意を感じる

と待たない)や病態の複雑な有効な新薬により著明に改善する)や骨盤臓器脱(女性の骨盤底の構造的弱点として、分娩や加齢による緩みという「女性の宿命」として、膣から膀胱や子宮、直腸が脱出する病態)最近ではヘルニアの一種としてメッシュを用いた膣壁形成術で、子宮を摘出する必要もなく、安全、かつ簡便に実施可能となつて

いる)など女性泌尿器科疾患が著しく増加しています。

さらに、在宅医療を含む要介護者における排泄管理の問題は大きな社会的課題でもあり、泌尿器科はコメディカルや他科との連携チームによる融合的な未来力により、成熟した長寿社会での人に優しい医療を深化させ、より魅力的な臨床領域へと変革を続けていきます。